

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 31 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25285039

研究課題名(和文) アメリカ政治思想における共和主義と立憲主義

研究課題名(英文) Republicanism and Constitutionalism in the American Political Thought

## 研究代表者

宇野 重規 (UNO, Shigeki)

東京大学・社会科学研究所・教授

研究者番号：00292657

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 5,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はアメリカ政治思想史を、共和主義と立憲主義という視点から捉え直そうとする試みである。その際に、建国の思想から、19世紀における超越主義とプラグマティズム、20世紀におけるリベラリズム、リパタリアニズム、保守主義へとつながる固有の思想的発展と、マルクス主義やアナキズムを含む、ヨーロッパからの思想的影響の両側面から検討することが大きな主題であった。3年間の検討をへて、ヨーロッパの王政に対する独特の意識が、アメリカ共和政とそのコモン・センスに対する信頼を生む一方で、政府権力に対し個人の所有権の立場から厳しい制約を課す立憲主義を発展させてきた、アメリカ思想の弁証法的発展が明らかにされた。

研究成果の概要(英文)：This research project aims to reconsider the history of American political thoughts from the viewpoint of republicanism and constitutionalism. It includes both its endogenous development from the the thoughts of Founding Fathers, to Transcendentalism, Pragmatism, Liberalism, Libertarianism, and Conservatism, and its exogenous influence from European thoughts including Marxism and Anarchism. Three-years-research finally found out the dialectic development that underlies the American political thought: reliance on the republican government and its common sense on the one hand, and restriction of the power of government for the protection of property rights of individuals on the other. Both tendencies were brought by American consciousness toward European monarchies.

研究分野：政治思想史

キーワード：政治思想 アメリカ 共和主義 立憲主義

## 1. 研究開始当初の背景

現在、アメリカ政治思想研究には独特な見通しの悪さが見られる。最大の理由は、個別研究の著しい進展である。アメリカ本国はもちろん、日本においても、各時代の政治思想についてのモノグラフが圧倒的に充実した。建国期については、これまでも『ザ・フェデラリスト』を中心に、建国の父たちの政治思想についての研究が蓄積されてきたが、これまで必ずしも十分にその思想に光が当てられていなかったアダムズ父子にまで検討は及んでいない。さらに 20 世紀アメリカを代表する思想家といえばデューイの名があがるが、さらにニーバーとの比較研究も発展している。これに加え、現代政治哲学の復興者であるロールズをめぐる論争については、言うまでもなく研究は汗牛充棟である。しかしながら、このような個別研究の発展を前提に、アメリカ政治思想史の全体像を、一定の見通しの下に一貫して描き出す試みはいまだに課題として残されたままであった。

## 2. 研究の目的

本研究はこのような課題に、「共和主義と立憲主義」という視点から取り組むものである。この場合の共和主義とは言うまでもなく、ジョン・ロック以来の自由主義的伝統をもってアメリカ政治思想史の主流とする伝統的な歴史観に対し、バーナード・ベイリンやゴードン・ウッド、あるいはジョン・ポーコックらの研究者によって主張された思想的伝統である。共和主義的な伝統は、個人的な利益よりはむしろ、社会的な共通善の実現を志向する市民の徳を強調し、中央権力の肥大化や腐敗を厳しく批判した。このような共和主義と自由主義の関係については、多くの研究が蓄積され、近年でもマイケル・サンデルの『民主政の不満』などによって新たな注目を集めている。これに対し、立憲主義とは、大別すれば、第一の要素は人民主権とそれに基づく代表民主制であり、第二は権力の分立お

よび抑制・均衡、個人の人権の尊重である。この立憲主義についても、長い議論の蓄積があるが、とくに民主政治においても権力制限の必要があるという意味で、しばしば立憲主義と民主主義の関係が問題にされてきた。このように、共和主義と自由主義、立憲主義と民主主義の関係についてはしばしば焦点があてられたが、これと比べると共和主義と立憲主義については、必ずしも十分に論じられてきたとは言えない。両者は等しく権力制限の思想を内包しつつも、市民の徳を強調する前者に対し、後者はしばしば違憲立法審査権など制度論的考察に重きを置いてきたのが、その一因であろう。しかしながら、思想的潮流としては、両者は大きく重なり合っており、その関係の精密な分析を、歴史的な視点から行うことは不可欠の要請である。

この場合、ヨーロッパにおける立憲主義がもたらした専制権力批判に主眼を置いたのに対し、アメリカの立憲主義にとっては、民主的な諸個人をいかに組織化し政治体制を構築するかという視点がきわめて重要であったことがとくに注目される。ジョージ・ケイティブが指摘するように、エマソン以来のアメリカ政治思想史において、democratic individuality の模索はつねに重要なテーマであり続けた。いわば民主的個人の思想史が立憲主義の伝統と深く結びついていたことが、アメリカ政治思想の独特の特徴をなしたのである。このような思想は、エマソンやソローらの超越主義からプラグマティズムへとつながり、さらにプラグマティズム第二世代であるジョン・デューイの影響は広くアメリカ・リベラリズムに及んだ。

さらにアメリカ政治思想史を見る上では、外部から絶えず流入する思想の影響を無視するわけにはいかない。とくに 20 世紀においては、二度の世界大戦の結果、大量の知識人がアメリカへと亡命してきたことの意義は圧倒的に重要である。政治思想史において

はアーレント、シュトラウス、フェーゲリンがとくに知られているが、これ以外にもアナキズムなど社会主義のアメリカへの流入や、社会学の分野などにおいても興味深い事例が多数存在する。このような人々がヨーロッパからもたらした思想的影響を、アメリカの democratic individuality の思想的系譜はどのように受け止めたかということも、共和主義と立憲主義を検討する本研究の重要な課題である。

このように、本研究は共和主義と立憲主義こそがアメリカ政治思想史を貫く縦糸であるという想定の下に、そこに 20 世紀において亡命知識人によってもたらされた外部からの影響を横糸として加え、総合的なアメリカ政治思想史の見取り図を描き出すことが目的である。

### 3. 研究の方法

時代的には、すでに指摘したように、建国期から出発し、超越主義、プラグマティズムをへて 20 世紀後半のロールズ以降の政治哲学の復権までの時期を対象とする。このように、きわめて長期を対象とするため、全体を(1)アメリカ固有の政治思想的伝統と、(2)それとの関係で重要な役割をはたした、外部からの政治思想的影響の二つに分け、そのそれぞれにおいて、重要な思想家を数名抽出して検討を行う。この場合も、各思想家の議論を詳細に検討すること自体を目的とするのではなく、あくまで「共和主義と立憲主義」という視点から整理する。そのため、共和主義と立憲主義の基本的定義の確定という作業を、個別思想家の検討と同時並行して行っていく。最終的には(1)の伝統と(2)の影響のそれぞれについて、一定の歴史的見通しを確定し、その上で、(1)(2)を総合する新たなアメリカ政治思想史の全体像を提示したい。

### 4. 研究成果

初年度は、メンバー間の問題意識の共有にあてられた。その結果、これまでのアメリカ政治思想研究が時代別に分断され、とくに建国期、19世紀、20世紀の研究を巨視的に接続する思考軸がいまだ明確化されていないこと、現在活発に研究されているロールズ以降の政治哲学についても、アメリカ政治思想史における位置づけを示すことによってその意義がより明確になること、さらに18世紀における啓蒙思想や、20世紀におけるアナキズムなど、大西洋を横断する知的交流を検討する必要があることが明らかにされた。

さらに、ジョン・ロックの所有権思想のアメリカへの影響、それとノージックのアナキズムとの関係、社会主義とアナキズムの関係なども議論された。また、ホイットマンとローティとの関係、way of life として理解された民主主義、さらにケイティブの inner ocean 論との関わりなどが論じられた。

このような成果を元に、社会思想史学会においてプラグマティズムに焦点を置いたセッションを開催した。結果として、アメリカ政治思想を貫く重要な水脈としてのプラグマティズムに関して、一定の展望を得ることができた。

二年目は、建国期の政治思想に焦点を置き、アメリカの共和制に洗剤する王政的権力の要素について検討を行った。あわせて超越主義の思想家として名高いエマソンについても本格的な検討を行った。さらにアメリカにおけるロマン主義とアナキズムの独特な関係に光をあてることができたのも、二年目の成果の一つである。

さらに現代アメリカにおけるプラグマティズム研究の第一人者であるコーネル・ウェストについても集中的に検討した。結果として、プラグマティズムの思想が第二次大戦後以降のアメリカ思想においてなお、大きな影響を有していることが明らかになった。また、

昨年に引き続き、社会思想学会において超越主義の社会思想に焦点を置いたセッションを企画した。

最終年度は、格差是正のための社会的再配分を重視するロールズのなりベラリズムに対し、所有権を尊重して、政府による再配分に批判的なりバタリアニズが存在するというという従来の対立図式を破るような新たな議論が展開されていることに注目して、研究を行った。結論として、アメリカ政治思想を貫く二つの思想的伝統の再編として20世紀後半のアメリカ政治思想の展開を把握する見通しが得られた。

同時にモーゲンソーやアーレントら亡命知識人の1960年代におけるアメリカ政治思想への影響と、その後の影響力低下の背景についても議論された。いわばアメリカ政治哲学の勃興の思想史的位置付けがえられたことになる。

さらに現代アメリカ保守主義の中核にある「融合主義」や、ベンジャミン・フランクリンの政治思想など、これまで扱いきれなかった論点も検証した。結果としてアメリカ建国以来の思想について、所有権と共和主義の思想がどのように相互に関係しながら、アメリカ固有の立憲主義を生み出したか、そのメカニズムについて、展望が得られた。

以上の成果に基づき、単行本の刊行を目指した作業を行った。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計11件)

井上 弘貴、アンドルー・カーネギーとアングロ・アメリカン統合の構想-世紀転換期の環太平洋における圏域の可能性、イギリス哲学研究、査読有、39号、2016、19-34

森川 輝一、アーレントのソポクレス解釈-ハイデガーとの対向のなかで、法学論叢、査読無、176巻5-6号、2015、208-235

小田川 大典、平等論の分析的転回-ジェラルド・コーエンについての覚え書き、岡山大学法学会雑誌、査読無、64巻3・4号、2015、

451-465

井上 弘貴、ジョン・デューイとデモクラティック・リアリズム-『公衆とその諸問題』の再検討、日本デューイ学会紀要、査読有、54号、2013、169-179

[学会発表](計11件)

石川 敬史、アメリカ革命と正統の創設、日本政治学会、2015年10月10日、千葉大学(千葉県千葉市)

宇野 重規、平等問題の来歴-トクヴィルから現代まで、日本政治学会、2015年10月11日、千葉大学(千葉県千葉市)

宇野 重規、政治家オバマの形成と政治学、日本政治学会、2014年10月11日、早稲田大学(東京都新宿区)

石川 敬史、J・G・A・ポーコックの「新しいブリテン史」におけるアメリカ革命、日本アメリカ学会、2014年6月8日、沖縄コンベンション・センター(沖縄県宜野湾市)

小田川 大典、スタンリー・カヴェルと超越主義、社会思想史学会、2014年10月26日、明治大学(東京都千代田区)

井上 弘貴、プラグマティズムと世紀転換期におけるローカルな社会改革の展望、社会思想史学会、2013年10月27日、関西学院大学(兵庫県西宮市)

宇野 重規、政治思想としてのプラグマティズム、社会思想史学会、2013年10月27日、関西学院大学(兵庫県西宮市)

[図書](計15件)

大瀧 雅之・宇野 重規・加藤 晋、東京大学出版会、社会科学における善と正義-ロールズ『正義論』を超えて、2015年、25-48

犬塚 元、石川 敬史他、岩波講座政治哲学2 啓蒙・改革・革命、2014年、151-173

宇野 重規、小田川大典他、岩波講座政治哲学3 近代の変容、2014年、25-47:177-199

齋藤 純一、森川 輝一他、岩波講座政治哲学5 理性の両義性、2014年、53-74

宇野 重規、筑摩選書、民主主義のつくり方、2013年、218

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

宇野 重規 (UNO, Shigeki)

東京大学・社会科学研究所・教授

研究者番号：00292657

### (2)研究分担者

小田川 大典 (ODAGAWA, Daisuke)

岡山大学・社会文化科学研究科・教授

研究者番号：60284056

森川 輝一 (MORIKAWA, Terukazu)

京都大学・公共政策大学院・教授

研究者番号：40340286

前川 真行 (MAEGAWA, Masayuki)  
大阪府立大学・地域連携機構・准教授  
研究者番号：80295675

谷澤 正嗣 (YAZAWA, Masashi)  
早稲田大学・政治経済学術院・准教授  
研究者番号：20267454

井上 弘貴 (INOUE, Hirotaka)  
神戸大学・国際文化学研究科・准教授  
研究者番号：80366971

石川 敬史 (ISHIKAWA, Takahumi)  
東京理科大学・基礎工学部・准教授  
研究者番号：40374178

仁井田 崇 (NIIDA, Takashi)  
名城大学・法学部・准教授  
研究者番号：70611630